

ません。そもそも西田幾多郎は西洋の哲学者や哲学書をほとんど引用しません。

カントの形而上学批判は、ハイデッガーによってもなされていません。ハイデッガーは「存在と時間 (Sein und Zeit)」「実存の時間性」という観点からカントを批判しました。それと対比すれば、西田は「実在と場所」「実在の場所性」という観点からカントを批判したといえます。西田は場所の哲学を書物にし、同僚と話し、学生に講義しており、場所という概念は、相当深く京都学派に自覚されていたと思います。そのような環境下で、和辻哲郎は「風土」で、ハイデッガーの存在の時間性に対し、存在の空間性 (Raum) を対峙させます。空間軸に立つて世界を了解するというのは、西田の場所の哲学を知っていれば、自然のなりゆきです。

ベルク氏 私は地理学をもとにした者ですけども、人文地理学のフランス学派の親であるポール・ヴィダル・ドゥ・ラブラーシュが、地理学は場の学、場所の学 (science des lieux) であり、人間の学ではなく

と通念の原理そのものだ。

知事 見立ては、日本ではよく使います。落語を聞かれたことはありますか。

ベルク氏 いや、ありません。

知事 落語の寄席では噺家は座布団に座って、手に持つのは扇子です。扇子は話によって、刀や鉈子や盃など、様々な物に見立てられます。観客は扇子を見ているが、落語家が扇子をお鉈子と見立てれば、扇子を眼前にしながら、それを鉈子として見ている。寄席でなくても、たとえば降る雪を散る花に見立てるとか、見立ては、様々な場面の日常生活でみられる日本人の認識方法です。特別ではなく、わかりやすい方法です。

どうして日本人のだけれど「見立て」という物の見方をするのかと思うんですが、それはおそらく中国との関係で生まれたとも思います。たとえば瀟湘八景という、宋代の洞庭湖の八つの景色が非常に美しい。それが絵に描かれると、その絵を見た日本人が、日本でこれに当たるのは何かということになって近江八景、金沢八景などになりました。今、眼前に富士山が見えますが、昔、例えば

て場所の学である、と言っているんです。ですから私は、西田幾多郎が「場所」という言葉を使ったのを初めて聞いたときからぜひ読まなければならぬと思っただけでも、同時にあれは非常に難しいといわれていたから、長い間あえて読まなかったのです。

知事 西田哲学は日本人が読んでも難解です。

ベルク氏 何年か待った後やっと読んだのですが、やはりご存じのようにその場所の論理は述語の論理と同義なものとして西田が使っていますが、生物にとつて特に人間にとつて現実とは何であるかという、純粋な客体でもなく、純粋な主体性の現れでもないけれど、ちょうどその間ぐらにある。私はそれを「通態 (tr



フランス国立社会科学高等研究院 教授
オギュスタン・ベルク氏

1942年生まれ。地理学者。フランス国立社会科学高等研究院教授、欧州学士院員。パリ大学で博士号 (地理学) を、パリ第4大学で博士号 (文学) を取得。日本でも日仏会館学長、宮城大学教授、国際日本文化研究センター客員研究員などを務めた。2018年、第26回コスモス国際賞を受賞。

ajection) と呼んでいます。その通態性はどうか働かかといいますが、西田幾多郎の「述語の論理」と、アリストテレス以来の「主語の論理」とを合わせて、その通態ができるかと考えるようになりしました。

風土と見立て

ベルク氏 学になるためには、主語の論理も述語の論理も両方必要です。例えばこの花は私にとつてきれいです。花は「きれい」として、私にとつて存在する。その「と」が一番大事なところなんだと思います。すなわちBとしてのA、あるいは非AとしてのA。その両面が通態的に働いて現実が現れてくると風土が生まれる。それは、私の風土論の中心的なモー

で、それは働いている。

けれども、それだけではないのです。それだけだったら述語の論理も要らない。そうではなくて、主語の論理と述語の論理の両方が必要です。なぜならば、例えば一方には瀟湘八景があり、一方には近江八景があるとしますと、その両方の場合に、もとの物理的な山が必要で、一般的な現実においても、物理的な存在の主語の論理が基盤にあつて、それについて展開するのが述語の論理であつて、その通態によつて、必ず何かとして、現実が現れるのです。

知事 「見立て」を先生が認識の原理として発見された功績はきわめて大きいと思います。と言いますのは、我々日本人にとつては、あまりに当たり前すぎて自

覚されてこなかったからです。「と」として」という言い方は日常茶飯のことですから。

ベルク氏 そうでしょう。

知事 静岡県でもつい最近、近江八景ならぬ「遠江八景」という冊子を編みました。有馬朗人先生とか芳賀徹先生とか、立派な先生方が瀟湘八景の景色を浜名湖の景色に見立てています。見立てはそのように普通に日本人がやっていることです。そういう日本人の日常の認識方法が、先生の風土学で理論づけられたかなと思います。

今日はどうもありがとうございました。



静岡県知事 川勝平太

1948年生まれ。京都市出身。早稲田大学、同大学院を経て英オックスフォード大学で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在3期目。